



# メイドで、義妹で、 三姉妹!?

上原りょう

illustration ◎ すめらぎ琥珀

美少女文庫  
FRANCE  SHOIN



## ブロード

## メイドアカデミーからの卒業

リーンッ、ゴーンッ、リーンッ、ゴーンッ。

すっかり耳になじんだ鐘かねの音が、抜けるような青空のなかに溶けていく。

空の色は日本よりも少しくすんでいるかもしれない。それでも雲のたなびきや、陽射しはやっぱり変わらない。

たとえ離ればなれでも、同じ空の下にずっといたんだと、そう考えてみる。

すると、離ればなれの二年間なんてなんでもないように、思えた。

鐘の音を聞くのも今日が最後だと思うと、なんだかさみしい。

でもこれがさみしいと感じられるのは、無事、メイド養成学校として名高い、アカデミーを卒業した証拠なのだと自分に言い聞かせる。

そして私は今、『願いの樹』のところにいる。



アカデミーのなかでもひとときわ小高い場所にあるこの丘からは、まるで緑の海を思わせるような田園風景が一望できる。風が吹くと、海面が揺らぐように、鮮やかな緑色が波を打って流れていく。西から東へ一分のずれもなく。

私はそんな見慣れた風景を背にして、そばに隆々<sup>りゅうりゅう</sup>と枝を伸ばして葉を繁らせている、大木の幹へ手を添えた。

卒業したその日、紙に願い事を書いて、この樹の下に埋めるとそれが叶う。

このアカデミーに伝わる言い伝えだ。

（これってメイドとしてのお願ひ、じゃなくてもいいの、かな……？ いいのよね、そういう制約があるって聞いたことないし）

でもこれはやっぱりどうなのかな、とちらつと自分の『願ひ』を見直す。

自分で書いたとはいえ、見直すと実際、顔から火が出そうなくらい恥ずかしい。

（うーん……やっぱり、書き直そう……かな……）

「碧いー！」<sup>あおい</sup>

私を呼ぶ声。私は手に持っていた短冊をどうしようかと思ったが、今から穴を掘って埋める時間もなくて、とりあえずポケットにねじこんだ。

ぐしゃ、というあまり歓迎できない音がした。曲がった短冊も有効よね、と内心不安に思いながら振りかえる。



そこには私の姉と妹がいた。姉は瑠璃<sup>るり</sup>、妹は紺乃美<sup>このみ</sup>という名前。私は次女だ。

二人は私のところまで来ると、軽く息をはずませながら肩で呼吸をした。

「もう、碧、こんなところでなにしてるの？」

「うん……なんだか感傷にひたっちゃった」

もう卒業だものね、ぼつりと瑠璃姉さんがこぼす。

「長いような、短いような生活だったね……」

私は目の前の美しい風景に感傷的につぶやいた。

「そうだね。……でも私としては微妙、かな？　だって妹たちと一緒に卒業なんて、まるで私、留年したみたいよう」

姉の言葉に、私たちは顔を見合わせた。それからふふと笑う。

「仕方ないよ、姉さんは最難関のハウスキーパー課程なんだから。普通は五年なのに……それを三年で修了なんてスゴイよ」

「うん、お姉ちゃん、すごい、すごいいよ！」

紺乃美が、ぴよんぴよんとウサギのように飛び跳ねた。

それでも一番すごいのは紺乃美だ。たしかに私たちとは課程が違ったが、近來稀<sup>まれ</sup>に見る優秀さと言われてたった一年で卒業なのだから。

「まあ……ね……うん。いつまでも離ればなれはいや、だから……」



普段はあまり得意にならない姉さんが心なしか、得意げだ。きっと姉さんも日本にいる『ご主人様』に一刻も早く会いたいんだ。やっぱり人の原動力は想いの力なんだなとあらためて感じた。

想い……。そう。それで私もがんばれたのだ。この二年は苦しかったけど、がんばれた。すべては想いのおかげだ。

「あ、ところで……。二人ともどうしたの？ 急いでたみたいだけど……」

「ああ、そうよ、そうっ。もう卒業式はじまっちゃうの。もうさっきの鐘かねの音、聞こえなかったの？ 私たち、小間使いレディクラスの人たちから搜すよう言われたのよ」

「あ、ごめん」

うわ、卒業式のことすっかり忘れてた。もう意識は日本に帰った気でいちゃったよ。「ほら、早くしなさい。終わりをければすべてよし、終わり悪ければせっかく今までがんばってきてもダメなんだからね」

姉の小言にうなずきながら、私は緑繁る大樹のさらに向こう、日の光であつと明るくなった大空を見あげる。

私たちはこれからアカデミーを卒業します。

そしてあなたの元へ帰ります。あなたにお仕えるために――。



